夜が溜息をつく

笹沢左保

検印廃止

夜が溜息をつく

著者　笹沢左保
発行者　井上正也
印刷所　三恭印刷株式会社

昭和四〇年十二月一〇日　一刷印刷
昭和四〇年十二月二〇日　一刷発行

東京都千代田区神田駿河台
三丁目五番地・三五ビル内
発行所　株式会社芸文社
電話東京（二九二）〇二二二
振替・東京九三五九番

定価　二九〇円

㋐—17'

製本・教化製本

夜が溜息をつく

笹沢左保

目次

第一章　貴重なガラスの飾りもの　五
第二章　死と取引きと、そして罠と　六〇
第三章　この島の今夜こそ二人の記念日に　一〇〇
第四章　俺はもう用のない人間なのだ　一三七
第五章　人殺しが死んだ夜は暗い　一九〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

装幀・早川公二

挿画・土居淳男

貴重なガラスの飾りもの

第一章

1

有料道路の料金所を通り抜けると、道路は更に急な上りとなる。三月も中旬というのに、道の両側に残雪が点々としていた。深夜でもないのに、すれ違う車はなかった。

やがて、有料道路は左右に分かれる。タクシーは、カーブしながら右手の道へ入った。すぐ、ホテルの門だった。近代的なビルではなく、タテよりもヨコに長いホテルの建物は、いかにも山荘という感じである。

タクシーを降りる。ボーイが迎えに出て来た。タクシーの運転手に料金を払いながら、寒気を覚えた。八四八メートルの頂上まで行かなくても、気温はかなり低いらしい。

思わず背広の襟のあたりへ手をやって、比叡山国際ホテルの建物を振り迎いだ。どの窓にも、電光が滲んでいた。そのうちの一つの窓に、剣崎千鶴子の吐く息

が吹きかけられているはずだった。
ボーイに従って、ガラスのドアの中へ入る。女の体温のような熱気が、身体を柔かく包む。適度の暖房だった。正面にロビー、右側にフロントがあった。ボーイが一礼して、フロントへどうぞと、手で示した。
ロビーには、外人の姿が多かった。外人の団体客でも、来ているようだった。テレビの音声が聞こえるだけで、別にザワついてもいないが、ホテルは満員だという雰囲気であった。
「大丸製薬の海老原だけど……」
と、フロントの係員に告げる。係員は顔を上げた。まだ若い男だった。
「海老原さまですね。お待ちしておりました」
事実、海老原秀一が到着するのを待っていたようである。海老原が宿泊者カードに住所氏名を記入している間に、もう部屋の鍵を持ったボーイが彼の背後に立っていた。多分、海老原が今日の予約客の最後の一人だったのだろう。
「ご案内致します」
海老原のスーツケース一つの小さな荷物を持って、ボーイはエレベーターの方へ向かった。エレベーターは、フロントの向かい側にあった。小型のエレベーターで、一緒に乗ったボーイの息使いが聞こえる。
部屋は三階であった。ボーイが立ち去るのを待って、一通り部屋の中を検分して回る。バス、トイレ、衣裳戸棚、三点セット、フロア・スタンド、そしてシングル・ベッド。別に不服はなかった。
窓のカーテンを引く。窓の外の夜景が、都会のホテルの場合とは違う。黒々と山波が、はるか彼方まで広がっている。左手に、赤、緑と色とりどりの灯が点在していた。大津の街である。
灯の洪水は、そのまま琵琶湖の黒い湖面に映じている。右前方には遠く、更に広い面積の灯の絨毯が敷かれてあった。京都市だった。それらの市街地と、この比叡山上のホテルとは闇によって完全に隔絶されている。

孤立している世界へ来たような気がする。ここでなら、どんなことをするのも許されるような感じだった。事実、海老原秀一もこれからこのホテルで、あまり常識的とは言えない行動をとることになるはずである。

海老原秀一は、黒皮のコートをベッドの上に投げ捨てると、電話機に近づいた。受話器を耳に当てながら、抜き取ったピースをくわえる。

「四一二号室を……」

と、交換手に告げて、海老原秀一はライターを鳴らした。

「剣崎でございます」

やや気どった口調で、千鶴子の声が出た。声も警戒しているようなそれだった。海老原からの電話を心待ちにしていたのに違いない。それだけに、相手が誰であるか確認しないうちは、滅多なことを口にできないのだ。

「海老原です」

「もう、このホテルに来ているのね」

千鶴子の声が、俄かに若々しくなった。

「ええ」

「交換手が、外線からお電話ですって言わないんで、そうだろうと思ったの」

「課長は？」

「京都のナイト・クラブへ出かけて行ったわ。岩沢教授の接待で……。お部屋には、わたくし一人よ。早くいらして……」

「危険ですね。ぼくの部屋の方へ来ませんか」

「シングルのお部屋に、男と女がいたら、メイドやボーイが変に思うでしょう」

「夫婦でとっているツイン・ベッドの部屋に、ご主人の留守中、ほかの男が出入りする。この方がもっとおかしいですよ」

「そうね。主人がいつ帰って来るかって、落着けないかも知れないわね。いいわ、そっちへ行く……」

「三〇五号室です」

「着換えて行くから、十分ぐらい待たせるわね。じゃあ……」

媚びと甘えを語尾に加えて、千鶴子は電話を切った。千鶴子は、早くも華やかな気分に酔い始めているようだった。彼女の『女』は、期待感に疼いている。弾ずむ気持を押さえきれないことだろう。

海老原秀一は、ベッドに腰を沈めた。何となく気が重い。これから、成熟しきった人妻の濃厚な愛技に応じなければならないのだと考えただけで、億劫になる。

最近は、千鶴子の相手をすることが重荷になって来ている。セックスの捌け口として千鶴子を利用しているのにすぎないと自分を納得させながら、実は彼女に振り回されているような気がする。

女が負担になり始めたら、別れるべきだった。しかし、今すぐ千鶴子と手を切ることは、不可能に近かった。千鶴子は、夢中になっている。今が最も燃え盛っている時期なのだ。別れ話など持ち出したら、逆上して何をするか分からない。

千鶴子が上司である課長の妻だということも、海老原秀一の弱点だった。千鶴子との関係を知られることが怖いわけではない。会社を逐われることを、恐れているのでもなかった。

ただ、面倒なことは避けたかったのである。生き甲斐があるわけでもない人生に、余計な波風を立てて、煩わしい思いをしたくないのだ。

ドアが、ノックされた。海老原秀一は腰を浮かせもしないで、声で応じた。濃紺のスーツ姿の千鶴子が、身体をドアの隙間から滑り込ませて来た。

濃紺のスーツは、色白で小柄の千鶴子によく似合った。髪の毛も長めだし、一見して人妻という感じではなかった。三十二歳という実際の年より、四つ五つ若く見える。美貌ではないが、女らしい新鮮な印象を与えた。

千鶴子は後ろ手にしめたドアに寄りかかって、艶然と笑って見せた。赤い小さな唇に、覗いた歯が白かった。それから、彼女はおもむろにドアの前を離れて、

海老原秀一の方へ絨毯を踏んで来た。

海老原は、倒れ込んで来る千鶴子の身体を、胸と膝で受けとめた。小柄だが、しっとりと重味のある女体だった。嗅ぎ馴れた女の香料が、彼の鼻腔をくすぐった。

「わたしが京都にいて、あなたが東京にいると思うと耐まらなかったわ。もう二度と会えないような気がして……」

と、千鶴子は海老原の肩に顎を埋めて囁くように言う。目を閉じている。

「たまたま社用で京都へ来ることになったけど、それがなければここで奥さんに会えなかったでしょうね」

海老原は、千鶴子を形式的に抱いている。だが、女の肩越しにドアの方へ向けている彼の顔は無表情であった。

「愛しているわ……」

千鶴子は不意に海老原の顔を覗き込んで喘ぐように言った。その潤んでいる目には、恍惚感があった。

愛している——と、そんな女の表現に、海老原は内心で苦笑していた。これが、愛というものだろうか。性的欲求にすぎないではないか。

千鶴子はただ、夫から得られなかったものを、海老原から与えられただけなのである。結婚して八年間、夫の剣崎竜介は一度も妻の千鶴子に性的満足を与えたことがなかった。俗に言う『女の歓び』を、海老原によって半年ほど前から味わえるようになっただけのことなのだ。

確かに、性的満足は重大なことである。夫より海老原に強く惹かれるのは、女として当然のことかも知れない。しかし、それを愛と称するのは奇妙だと、海老原は空しい気持になる。

千鶴子が、唇を求めて来た。彼女の胸が、大きく波打ち始める。身体が熱くなる。腕に力がこもる。海老原の手をとって、千鶴子はそれをスカートのジッパーのところへ導く。

無意味な行為とは分かりきっている。しかし、海老

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

原も女の誘いに応じないではいられなかった。感情はまったくない。あるのは、性欲だけだった。海老原は無感動な眼差しで、千鶴子の身体から衣服を剝ぎ始める。

恥じらう必要もない男女だった。大胆に、目的だけを果たそうとする。余計なことは考えなかった。女の裸身に唇を押しつける男も、男の愛撫にベッドの上で身をよじっている女も、どこで誰と何をしているのか一切を忘れているのだった。

2

大丸製薬は、大手四社のうちに数えられている。製薬会社としては、大企業と言えた。総合ビタミン薬『ネオ・ビタ』と強肝剤『ルリトン』で大丸製薬は知られていた。

東京日本橋にあぞ本社だけでも、八百人の社員がいた。海老原秀一は、本社営業部宣伝課に属している。大学卒で年令三十歳と言えば、中堅どころの社員であった。

宣伝課長の剣崎竜介は、なかなかの切れ者だった。仕事熱心でもある。宣伝が売れ行きを決める製薬会社では、宣伝課はかなり重要な位置を占め、それだけに多忙でもあった。剣崎が四十歳の若さで宣伝課長のポストを得たということにも、それなりの理由があるのだ。

まず第一に、剣崎の実力である。プランナーとしても、また実務面でも、剣崎はやり手であった。もう一つ、総務部長の娘である千鶴子を妻にしているという利点もあった。大丸製薬の前身は、先々代の社長が経営していた薬品問屋だった。

大会社になった現在でも、まだ個人商店の名残りは完全に拭い去られていない。情実人事も、ないとは言いきれなかった。部長と姻戚関係にある剣崎の出世が早かったとしても、特に不思議ではないのだ。

剣崎が出張するということは、滅多になかった。今

度、彼が京都まで出向いて来たのは平安大学の岩沢教授を口説き落とすという重大目的があったからである。

平安大学医学部の岩沢教授は、心臓医学の権威として有名であった。その岩沢教授を、近々大丸製薬が売り出す予定の心臓活化の新薬の宣伝に引っ張り出そうというのである。テレビのコマーシャルに岩沢教授を出演させるわけだった。

これまでもそうだが、剣崎課長は旅行に必らず妻を同伴する。千鶴子との仲が円満であることを、示すためなのかも知れない。それに、大丸製薬の現社長が大変な愛妻家で、常に夫婦の和を説くという点も、剣崎の計算に入っているのだろう。

剣崎夫婦が東京を離れて三日目に、京都の比叡山国際ホテルから千鶴子が、海老原秀一のところへ電話をして来た。会いたいというのである。何とかして京都まで来てくれと、千鶴子は哀願した。

しかし、そんな勝手な行動をとることは、もちろん許されなかった。海老原は一応、千鶴子をなだめて断念させた。

ところが、その翌日、今度は剣崎課長から会社へ連絡があって、岩沢教授が思ったより堅人で交渉が長引きそうなので、誰か寄越して欲しいと言って来たのである。剣崎は、印南悠造という宣伝課員を一人、連れて行っていた。

だが、印南悠造は平社員でも五十という年配者だし、使いにくい上に役に立たないのかも知れなかった。それで、剣崎は新たに応援を求めて来たらしい。そして偶然、海老原秀一が京都行きを、課長補佐から命じられたのだった。

海老原秀一は今日の午後三時の便で、空路大阪へ飛び、大阪空港から比叡山へ車を走らせて来たのである。千鶴子には午前中に、電話で京都へ行くことを知らせてあった。

女の度胸は大したものだった。夫と一緒に滞在しているホテルで、海老原に休息も与えず満足を求めて、目的を果たした今は、安らかな寝息さえ立てているの

だ。
海老原はベッドから抜け出した。巾のせまいシングル・ベッドに、大人ふたりが身体を横たえてはいられなかった。
千鶴子は、陶酔の余韻が残っている寝顔で仮睡している。顔と喉のあたりに、まだ汗の湿りがあるようだった。
海老原は、煙草に火をつけてからワイシャツを着てズボンをはいた。ついさっき、叫ぶように彼の名前を呼びながら四肢を痙攣させた千鶴子が、すでに遠い存在となっている。充実感はなく、不快な疲労だけが残っている。いつものことだが、千鶴子が満足して海老原は空虚になる。
こんな関係が、いつまで続くのだろうかと、もの憂い気持になる。今ではまだ、千鶴子に妻の座を捨てるほどの勇気はないらしい。だが、いつ彼女が剣崎と離婚するからと言い出すか分からないのだ。
千鶴子は、しきりと愛しているという言葉を口にするようになった。肉体的な満足を愛と結びつけられないうちに、彼女との関係を清算すべきだった。
電話のベルが、けたたましい音を立てた。海老原が受話器をとった。
「ああ、海老原君かね」
と、相手の声は間違いなく剣崎課長であった。海老原が振り返ると、夫からかと開いたばかりの目で千鶴子は訊いた。海老原は頷いた。千鶴子は反射的に上体を起こすと、慌て気味に両手で胸の隆起を隠した。
海老原秀一は、軽く咳ばらいをした。別に自分を落着かせようとしたわけではない。弱々しく、何となく空虚な咳ばらいは彼の癖であった。
「フロントで聞いたんだが、君、ここへ着いたばかりだそうだね」
と、剣崎竜介の語調は、いつもと変りなかった。自分の妻が誰とどこで何をしていたのか、もちろん剣崎課長が気づいているはずはなかった。
「はあ、小一時間ほど前です」

海老原は、スリップをかぶっている千鶴子の後ろ姿を、目の隅で捉えた。脂肪がのっている千鶴子の白い肌が、なぜか惨めなものに見えた。慌てている彼女に、ふと軽蔑を覚えた。

「ところで、家内を知らないかね。部屋に鍵がかかっていて、どうやらいないみたいなんだが……」

「さあ、ここへ来てまだ奥さんにはお目にかかっていませんが」

「どこへ行ったんだろう。ホテルの中にいることは、間違いないんだがね」

「ところで、岩沢教授の一件はどうなりましたか?」

「進展していないんだ。そのことで早速、君と打ち合わせをしておきたいんだがね、ロビーにいるから、ちょっと来てくれないか」

「分かりました。すぐ、参ります」

電話を切って、海老原は上着の袖に腕を通した。千鶴子も、紺のスーツを身につけ了えたところだった。

「奥さん、先にここを出て下さい。エレベーターで地下まで行って、バーへ入るんです。われわれがバーへ行くまで、何か飲んでいて下さい。いいですね」

海老原は、命令するように指示を与えた。千鶴子は頷いた。頷いてから彼女は海老原の肩に両手をかけて、背のびするようにして彼の唇を軽く吸った。海老原は、慌ただしい足どりでドアへ向かう千鶴子を見送った。すっかり緊張しているくせに、別れ際の接吻を忘れない。千鶴子という女の神経が、わからなかった。

部屋を出て、海老原はゆっくりと階段を降りて行った。ロビーに、人影は疎らになっていた。ベランダとの仕切りのガラス戸の前に、剣崎竜介の姿があった。

剣崎と向かい合いのアーム・チエアに、こちらに背を向けて坐っているのは印南悠造だった。剣崎課長がすぐ海老原に気づいて、手を上げた。青白い剣崎の顔が、眼鏡でキラリと光った。

印南悠造も振りかえってホッと安堵したような笑顔を見せた。五十歳で未だに役付きにもなれないこの好人物は、海老原の来援を心底から歓迎しているようだ

った。
「ご苦労さまです」
海老原は課長に目礼を送ってから、空いているアーム・チエアに腰を落した。今、この男の妻を抱いて来たという実感はなかった。だから、剣崎を恐れる気持もない。自分はまったく倫理感に欠けているのかも知れないと、海老原は思った。
「いやあ、君に来てもらって勇気を得たよ」
と、剣崎課長は印南悠造の存在など無視しているような言い方をした。海老原が来たから心強いということは、印南悠造がまるで役に立たないと強調しているようなものである。しかし、剣崎はそんなことには少しも気を配らない。
弱い者は、頭から無視する。強い人間は、尊重する。剣崎課長のやり方は、そういう傾向にあった。合理的な出世主義者で、サラリーマンの世界にはよくあるタイプだった。
「それで、岩沢教授の件は?」
海老原は、剣崎課長を正視した。いかに部下に威張っても、どんなに辣腕であっても、自分の妻一人に、夫として満足を与えられない男だと思うと何となく剣崎が気の毒になる。しかも、妻を狂喜させている自分の部下が、目の前に平然と構えていて、彼はそれを知らないのだ。
「脈がないわけではないんだ。問題は、条件なんだな。ただ、岩沢教授はどのような報酬が欲しいのか、はっきり言おうとしないから困るんだよ」
剣崎は、眉間に皺を刻んだ。また、眼鏡の分厚いレンズが光った。広い額、高い鼻、薄い唇、そして青白い皮膚。いわゆる知的な顔である。
だが、目つきが陰険な感じだった。神経質そうなところが、策士を思わせる。海老原は無感動な表情で、剣崎課長を眺めやった。なぜ自分には、この男のような『欲』がないのだろうかと思う。
「多分、自分の方から条件を持ち出すことは、岩沢教授のプライドが許さないんだろうね。だから、教授が

満足するような条件を、われわれの方から持ち出すのを待っているらしいんだ」
「わたしの任務は？」
「平安大学医学部教授、心臓医学の権威という肩書きがあっても、岩沢教授だって所詮は人間であり、男でもある。色も欲もあるだろう。そこで、岩沢教授が一体何を求めているか、その点を嗅ぎ当ててもらいたいんだよ」
「課長たちでは、駄目なんですか？」
「ぼくも印南君も、若くない。岩沢教授だって、素直に本心を覗かせにくいんじゃないかと思うんだ」
「相手が若ければ、気を許して本音を吐くかも知れない、とおっしゃるんですか」
「そうだ。それで、選手交替だよ。明日、早速にでも岩沢教授に会ってくれ給え」
「わかりました」
「今夜のところ、連絡事項はそんなもんだね」
「バーにでも、行ってみませんか。奥さん、バーにいらっしゃるかも知れませんよ」
海老原は、腰を浮かせながら言った。印南悠造が、嬉しそうにニッコリした。彼は、酒には目がないのだ。剣崎課長も渋々ながら席を立った。剣崎は、煙草も酒もやらない。しかし、千鶴子がバーにいるかも知れないと言われて、行ってみる気になったようであった。バーは、地下にある。テーブル席は二つ三つきりなく、長いカウンターが主であった。照明が暗く、客の姿がシルエットになって浮かび上っていた。外人ばかりで、日本人の客は千鶴子だけだった。
千鶴子は海老原に言われた通り、カウンターの端に席を占めてブランディ・グラスを両手で包んでいた。千鶴子は三人の姿を認めるとあらっというような顔をして見せた。巧みな演技であった。
「やっぱり、こんなところにいたのか」
剣崎は別に、妻の行動に関心を払っているわけではない。むしろ、無頓着でさえあった。だからこそ、半年以上も妻と部下との密通が続いていることにも気づ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb